

2018 年度第 2 四半期決算説明会サマリー・Q&A

(2018 年 11 月 7 日 開催)

(1) 経営計画「Denka Value-Up」進捗状況

数値目標「2020 年度連結営業利益 420 億円・営業利益率 10%以上・スペシャリティー化率 75%以上」
に対し、2018 年度の予想営業利益は 360 億円と順調なスタート

【参考】スペシャリティー事業営業利益・連結営業利益(利益率)	単位：億円
2017 年 実績	167・337 (8.5%)
2018 年 予想	195・360 (8.8%)
2020 年 目標	315・420 (10.0%以上)

(2) 2018 年度 第 2 四半期決算概要 (前年比)

単位：億円

①売上高	1,983	+105	数量増+15・販売価格差+90
②営業利益	146	+3	
数量要因		+20	電子先端プロダクツ製品等
スプレッド改善		+26	売価 +109 > 原燃料 ▲82
為替影響		▲1	売価 ▲18 > 原料他 +17
その他コスト要因		▲14	SM 定期修繕
		▲10	凍害 (米国 Denka Performance Elastomer)
		▲3	濁水 (青海工場水力発電減)
		▲4	その他製造費等 (労務費・他)
先行投資負担等		▲10	研究開発負担増

要因別内訳計		+3	

売上高 電子・先端製品が販売数量を伸ばした原燃料高に応じた石化系製品の売価改定で増収
営業利益 数量増によるプラスに加え交易条件の改善が寄与

SM 定修・米国寒波・青海濁水・研究開発等先行投資負担増などのマイナス要因をカバーし増益

(3) 2018 年度 業績予想 (前年比)

単位：億円

①売上高	4,100	+144	数量増+20・販売価格差+124
②営業利益	360	+23	
数量要因		+76	電子・先端プロダクツ製品など
スプレッド改善		+26	売価 +154 > 原燃料 ▲127
為替影響		▲4	売価 ▲29 > 原料他 +25
その他コスト要因		▲14	SM 定修
		▲10	凍害 (米国 DPE)
		▲3	濁水 (青海水力発電減)
		▲36	その他製造費等 (労務費・その他費用・他)
先行投資負担等		▲11	研究開発負担増

要因別内訳計		+3	

売上高 自動車関連を中心に電子・先端プロダクツ製品の出荷量が大きく伸長、価格面でもクロロプレンゴムや
スチレン系製品の原燃料価格の上昇に応じた価格改定などで増収。

営業利益 数量増によるプラスに加え交易条件の改善が寄与

SM 定修・米国寒波・青海濁水・研究開発等先行投資負担増などのマイナス要因をカバーし増益

(4) 株主還元

Denka Value-Up 「総還元性向 50%継続・今後配当をより重視・自己株式取得を機動的に実施」

2018 年度予想配当：中間 60・期末 60・年間 120 円/株 (配当性向 42%)

(5) トピック「当社自動車分野の成長戦略、現状と今後の展開」

- ・**セラミックス回路基板** 大型駆動モーターを制御するインバーターに使用
窒化アルミ（熱伝導性重視）、窒化珪素（靱性信頼性重視）の2品種をラインナップ
原料粉末から回路基板まで一貫製造する唯一のメーカー
販売計画：2022年度 130 -> 2025年度 190 億円
- ・**アセチレンブラック** リチウムイオン電池の正極に用いられ、活物質へ導電性を付与する
アセチレンを原料とする超高純度が自動車向け電池の高性能・高信頼性を実現
世界最大のアセチレンブラック生産能力を有し、需要の急伸にも対応可能
販売計画：2022年度 55 -> 2025年度 75 億円
- ・**球状アルミナファイラー** リチウムイオン電池の放熱対策に球状アルミナを充填したシートやグリースが使用
幅広い粒径ラインナップと高度な粒度設計技術により、各種放熱材料の熱伝導率向上に貢献
生産性に優れた製造プロセス、世界最大の生産能力
販売計画：2022年度 70 -> 2025年度 85 億円
- ・**車両軽量化・自動運転・コネクティッドカー**
車両軽量化：ライト・ウインカーのLED 化蛍光体「アロンブライト」、ヘッドライト用金属回路基板「ヒットプレート」
自動運転・コネクティッドカー：ミリ波レーダー低損失ファイラー・OLED 向け封止材・LCD 向け接着剤の開発
- ・**車両電動化の進展と当社製品の需要動向**
EV 化の進展によりエラストマー製品の需要は減少するものの、一方でセラミックス回路基板、アセチレンブラック、球状アルミナファイラーいずれも大きく増加し、車両電動化の進展は、当社自動車分野製品にとって成長の追い風
- ・**販売目標**（自動車関連製品） 単位：億円
2018年度 売上高 370 営業利益 60 営業利益率 16%
2020年度 売上高 500 営業利益 90 営業利益率 18%
2022年度 売上高 700 営業利益 150 営業利益率 21%

(6) 質疑応答

1.2018 年度経営概況に関して

1-1 エラストマー・機能樹脂の業績見通し

DPE は原料ブタジエン価格が高騰、長期のフォーミュラー契約先などに対し、引き続き製品価格引き上げによる採算是正を推進する。カーバイド・アセチレン法 CR も原燃料コストが上昇しており、足元 10 月からブタジエン価格が下落しているが値下げは行わない方針であり、青海工場の CR も価格改定を進める。来年度、独 CR メーカー 7000 トン増強が完成するものの、旺盛な需要に吸収され、需給タイトが続く見通し。DPE 凍害影響解消や採算是正により、来年度は CR 事業の増益を目指す。

1-2 インフラソーシャルソリューションの下期業績見通し

セメント値上げの浸透や上期数量減の要因となった自然災害影響の解消。

1-3 インフルエンザワクチン・検査試薬の今期見通しと sd-LDL-C 測定試薬の進捗状況

2018 年インフルエンザワクチンは一部製造株の増殖性が悪いが、これは期初に想定。安定操業に努めた結果、不合格品もなく出荷は順調。検査試薬は、春先の麻疹流行や・中国向け炎症マーカーの輸出増加が上期増収に寄与。sd-LDL-C（超悪玉コレステロール）測定試薬は 2018 年 7 月米国での正式販売を開始、大手検査センターで採用されている。現在、米国保険収載の途中で、中国も 2 社目の採用が決まっている。日本国内では、健康診断用に大手検査センター全てに採用が決定し、体外診断薬としての申請準備を進めている。各国の学術啓発活動に注力し、検査数の増加に繋げる。

2.自動車分野の成長戦略、現状と今後の展開について

2-1 セラミックス回路基板の性能要求

EV・PHEV の大型モーター搭載により、発熱量も増加。ヒットプレートのような金属基板でなく、従来は自動車用としてはオーバースペックだった窒化珪素・窒化アルミなど、より熱伝導性に優れたセラミックス回路基板が必要。このようなことから、当社はプレスリリースの通り三菱マテリアルとの共同開発をスタート。回路化技術に優れた三菱マテリアルと、セラミックス焼結技術に優れた当社が、より放熱性に優れたセラミックス回路基板で世界をリードしていく。

2-2 アセチレンブラックの増産対応

需要拡大が見込まれるアセチレンブラックは、千葉工場のアセチレンガス調達拡大、シンガポールでのマンガン電池向け製品からの振替、第 3 の製造拠点建設について、グローバルな視点で増産対応の具体策を検討中。

2-3 球状アルミナファイラーの需要動向

米国 EV 向けだけでなく、既に欧州の自動車メーカー向けにも採用実績がある。今後、EV メーカーが増加したとしても、当該放熱材料の熱伝導性を担保する充填材料は、球状アルミナであることに変わりがない。

2-4 自動車分野の設備投資

経営計画「Denka Value-Up」の戦略投資 600 億円の中で、セラミックス回路基板、アセチレンブラック、球状アルミナの各設備投資を予定。

BCP の観点からも、複数拠点化し（球状アルミナ：大牟田＋シンガポール、アセチレンブラック：千葉＋シンガポール＋第 3 拠点）、今後も高いシェアを維持する。投資額は短期間で回収し、固定費負担は吸収可能。

以上